

## 中央アジア出土

### 『首楞嚴三昧經』梵文写本残葉\*

—インド省図書館の知られざるヘルンレ・コレクション—

松 田 和 信

【序】 昨年の10月から11月にかけてロンドンの旧インド省図書館 (India Office Library and Records, 以下IOLと略, 現在は大英図書館の一部門) を訪ね, スタイン (M. A. Stein, 1862-1943) とヘルンレ (A. F. R. Hoernle, 1841-1918) が蒐集した中央アジア出土の梵語写本コレクションを調査する機会に恵まれた<sup>①</sup>。スタインの三次に亙る中央アジア探検およびヘルンレが独自ルートで集めた中亞文献については, ヘルンレが各国の研究者を動員して公刊した『東トルキスタン出土仏教文献写本』の第1巻を始めとして, 様々な写本が研究者の俎上に上ったが, その全体像となると今なお不明な点が多く, 特に梵語文献については, フランスのペリオやドイツ探検隊蒐集のコレクションに比べて, 研究から取り残された, いわば忘れられた存在となっている。スタイン・コレクション<sup>②</sup>については探検の公式報告書に写本目録が掲載されているが, ヘルンレ・コレクション<sup>③</sup>には目録もなく, 今までに研究出版された写本はその十分の一にも満たない。我国の東洋文庫にはIOLのスタイン・ヘルンレ梵語写本コレクションがマイクロフィルムで将来されている<sup>④</sup>。しかし今回の調査で分かったことであるが, このマイクロフィルムはIOLのコレクションのすべてを収めているのではなく, 特にヘルンレ写本については, 学界に未紹介の重要な写本がことごとく漏れていた。一カ月に亙る調査期間中に, 私はすべての写本を手にとって見る事ができた。その全体像については新たに発注した全写本のマイクロフィルムが到着し次第, 目録等を作成し, 調査者としての任を果たしたいと考えているが, とりあえず本稿ではコレクションの概略と現状を報告し, 併せて私が新たに証定し, 私自身の手で写真に撮り, 出版を許可された写本の中から『首

楞嚴三昧經』の断簡を紹介することにしたい。なおこれ以外に写真で持ち帰った新たな写本のうち、大乘の『大般涅槃經』の断簡33枚については私によって、『法華經』の断簡6枚については徳島大学の戸田宏文教授によって別途に出版準備中であるので、そちらを参照していただきたい。

## 1 コレクションの現状

**【OMP Bの写本】** I O Lのコレクションを説明する前に、大英図書館 (British Library) の東洋部 (Department of Oriental Manuscripts and Printed Books, 以下OMP B と略) にあるスタイン・コレクションに触れておきたい。スタインの中央アジア探検が齎した敦煌文書を含む歴大な文献類は、漢文、ウイグル語、ソグド語文献が大英博物館に、チベット語、梵語、コータン語、クッチャ語 (トカラ語B) 文献がI O Lに分散して取められたが大英博物館のものは大英図書館の独立後OMP Bに移管)、これはあくまで原則的なものであって、梵語文献もかなりまとまった量がOMP Bに保存されている。OMP Bでは、スタイン梵語コレクションのうち、有名な『法華經』カシュガル本の片割れなどは独立した番号 (Or. 9613) で登録されているが、それ以外の大部分の写本は Or. 8212 という登録番号のものに含まれている。Or. 8212 は、例えば敦煌の漢文文献が一括して Or. 8210 の番号で登録されているように、それ以外の様々な言語で書かれた雑多なスタイン中亜文献 (ただし若干の漢文文献を含む) に一括して付けられた登録番号で、その内部はさらに細かい番号に分かれている。このうち1番 (Or. 8212/1) から195番 (Or. 8212/195) までは、I O Lのフィルムとは別に東洋文庫にもマイクロフィルムが来ている<sup>⑦</sup>。この中、1番から73番、103、164、165、174番は梵語文献である。東洋文庫のフィルムは195番までであるが、Or. 8212 はそれに尽きるのではなく、私はOMP Bでこれの1927番まで見ることができた。このうち1361番から1927番は、ビニールケースに入れて束ねられただけの未整理文献ではあるが、多くの梵語文献を含んでいる。スタインの原番号のない小さな断簡が多いが、中にはほぼ原形をとどめているものもある。これらについてはOMP Bでもまだマイクロフィルムは作成されていない。なおかつて平川彰博士が報告された大英博物館のスタイン写本とはこの Or. 8212 のことである<sup>⑧</sup>。

スタイン梵語コレクションのうち、探検報告書所載の目録には出ているが、

IOLのコレクションに見つからないものはOMP Bの Or. 8212 の中にある  
と言ってよいかもしれない。今までの我国の梵語写本の研究者はほとんどこの  
事実に気づいていない。例えば、最近出版が開始された『梵文法華經写本集成』  
にリストアップされているスタイン写本のうち、所在不明とされる Kha-i-66,  
Kha-i-74b, Kha-i-213, Kha-i-303b, F-xii-9 などはこの中に含まれ、しかも 73  
番までにあるので、東洋文庫のマイクロフィルムから見ることもしめる。時  
間的余裕がなく、OMP Bでは十分に調査できなかったのも、あまり断定的な  
ことは言えないが、他の所在不明写本も Or. 8212 の未整理部分にあるように  
思える。ただ 195 番までの文献についてはOMP Bに謄写版刷りの目録があり、  
如何なる文献が含まれるかは一目瞭然であるが、これ以外の未整理部分とな  
ると、実際に写本を見せてもらって確認せねばならない。

**【IOLの写本】** ではIOLのコレクションはどうか。IOLにはOMP Bの  
Or. 8212 に含まれないスタイン写本、およびヘルンレ写本のすべてがある。現  
在写本は45個の木箱、二つのダンボール箱、およびいくつかのペーパーホルダ  
ーに収められている。木箱には数枚ないし数十枚のプレートを、一枚のプレ  
ートには一葉ないし十数葉の写本断簡を収める。ダンボール箱の写本は百数十枚  
のビニールケースに入れて束ねられただけの写本を収めるが、これはすべてヘ  
ルンレ写本である。ペーパーホルダーにはプレートに入り切らない大きな写本  
を収める。45個の木箱のうち、Box 1-13, Box 15-22, Box 35-40 はコータン  
語文献であるので、残り18箱のスタイン・ヘルンレ梵語写本の内容を簡単に示  
せば次の通り。なお新たに発注した全写本のマイクロフィルムが未着の現時点  
では、これは私の不確かなメモと記憶に基づくにすぎず、細部まで紹介できな  
いことをお断わりしておきたい。

[スタイン写本] Box. 30, 31, 32, 敦煌出土貝葉本『一万八千頌般若』Ch. 0079a<sup>⑪</sup>  
Box. 41, 42, 43, 45, 合計 115 枚のプレート(No. 1—115)<sup>⑫</sup>

[ヘルンレ写本] Box. 14, 23, 24, 25, 合計 31 枚のプレートに約 200 葉の断簡  
Box. 26, 9 枚のプレートに『般若經』の巨大な断簡と破片  
Box. 27, 9 枚のプレートに『般若經』と『法華經』の断簡<sup>⑬</sup>  
Box. 28, 9 枚のプレートにヘルンレ既出版断簡  
Box. 29, 2 枚のプレートに『法華經』カシュガル本 4 葉

Box. 33, 34, プレート数不明、『般若経』の巨大な断簡と破片

Box. 44, SH. No. の 22 枚のプレート, 内容未詳

スタイン写本は Box 30-32, 41-43, 45, および若干のペーパーホルダーに収められたものだけで、残りはヘルンレ写本である。ヘルンレ写本の方がはるかに量的に多い。ヘルンレ写本のうち Box 14, 23-27, 33-34, 44, スタイン写本のうち Box 30, 31, 32 の『一万八千頌般若』, および Box 45 のプレートのうち88番から112番までの24枚は東洋文庫に将来されたマイクロフィルムには写っていない。図書館の説明では、マイクロフィルム未収のスタイン写本のプレートが作成されたのは数年前で、それまでその部分の写本は未整理文献として仕舞い込まれたままになっていたとのことであるので、スタイン写本についてはフィルム未収の理由も分かるが、ヘルンレ写本についてはプレートも古く理解に苦しむ。ヘルンレ写本については、結局二つのダンボール箱、若干のペーパーホルダー、および既出版の木箱 (Box 28-29) の写本しかマイクロフィルムに写っていなかったことになる。未収分の写本はそのごく一部を除いて全く学界に紹介されておらず、しかもその中には数々の重要な断簡が含まれている<sup>⑭</sup>。私が発見した大乘の『大般涅槃経』の断簡のうちヘルンレ写本に含まれるものほとんどはこの中から見い出された。また『法華経』の断簡も章末の奥付けを含んだものであり、一目でそれと判る。無論これも今まで全く報告されていない。東洋文庫のマイクロフィルムは、212フレームの写本が裏表424コマのフィルムに収められ、そのうち、1から85, 208から212フレームがスタイン写本で、これ以外はヘルンレ写本である。ただしヘルンレ写本部分にはコータン語文献も沢山紛れ込んでいる。このフィルムが作成されたのは1950年で、その当時、写本はまだプレートに入れられていなかった。フィルムは白い紙の上に並べた写本を直接撮影している。1フレームには多いもので十数葉の写本断簡が写っている。現在のIOLでは、スタイン写本はほぼフィルムのフレームの順序でプレートに収められている。ヘルンレ写本については、紛れ込んだコータン語文献は分離されてコータン語の木箱に、梵語文献は、既出版分がプレートに入れて Box 28, 29 に収められ、他はまだダンボール箱に入れられたままである。マイクロフィルム未収分のヘルンレ写本のプレートは見るからに古いもので、フィルム作成当時はすでにそれがあつたはずである

が、何故フィルムに写っていないのか分からない。フィルム撮影時には、これらの木箱のプレートはまとめてだれかに貸し出されていたのであろうか。IOLでは、マイクロフィルムの原フィルムはすでに廃棄され、今は当時の事情を知る人もいない。

スタイン・ヘルンレ両コレクションの写本群の内容を概観するのは難しいが、一言でいえば、スタイン写本は西域南道のコータン近辺で蒐集された大乘經典が主で、ヘルンレ写本は西域南道の大乗經典および天山南路のトルファン近辺で蒐集された阿含・律が半々といったところであろうか。ダンボール箱の中のヘルンレ写本は多くのトルファン写本を含むが、ごく一部を除いてまだ誰も研究していない。IOLにはコレクションについての目録もカードもないので、来館者が個々の必要とする写本断簡を請求しても、それがどの箱のどのプレートにあるかの検索は困難である。それはIOLに働く人にとっても同じである。コレクションを順番に言てゆくより外はないのである。現在、博物館の北に大英図書館の新たな本部建物を建築中で、それが完成する1992年にはIOLもOMP Bもその中に移るとのことである。現在でも機構上は大英図書館の一部門にすぎないIOLがどうなるか、その名前さえもなくなって完全に大英図書館に吸収されてしまうのかどうか、まだ結論は出ていないとのことであった。ただそれまでは貴重なコレクションが現状のまま放置されることだけは確かなようである。

## 2 『首楞嚴三昧經』断簡

【文献と研究】 『首楞嚴三昧經』が中国に伝えられたのはかなり早く、二世紀末には支婁迦讖によって訳され、その後五世紀初頭の鳩摩羅什に至るまで十度にわたって訳されたといわれるが、現存するのは鳩摩羅什訳(大正 No. 642)のみである。チベット語訳(北京版 No. 800, デルゲ版 No. 132)は Śākyaprabha と Ratnarakṣita の手になるもので、『デンカルマ目録』に掲載されているので(『ラルー目録』No. 111)、九世紀初頭には訳されていたはずである。またコータン語訳写本のかかなりまとまった断簡<sup>15</sup>があるが、梵文原典は散逸し、Śāntideva の Śikṣāsamuccaya に二度引用される以外には、中央アジア出土の一枚の写本の断片が知られるだけである。『首楞嚴三昧經』は何度も漢訳され、初期大乘經典の一つとして注目すべきものであるが、中国や我国では教義研究上重要視

されず、本経に対する近代的研究もラモート博士の鳩摩羅什訳に対する翻訳研究(1965)まで待たねばならなかった。その後、本経は1970年に R. E. Emmerick によってコータン語訳テキストの校訂と研究が発表され<sup>⑬</sup>、同年に Bhikkhu Pāsādika によってチベット語訳から英訳され<sup>⑭</sup>、1974年には関西大学の丹治昭義教授によってチベット語訳から和訳されている。現在では我々は本経について、梵文原典を別にして十分な知識を持っているといえるであろう。

【梵文写本】 現在一般に知られている梵文写本の唯一の断簡は I O L のヘルンレ写本中に含まれるもので、F. W. Thomas によってヘルンレの前掲書中にチベット語訳とともに発表されている<sup>⑮</sup>。この一枚はヘルンレによって、No. 147. S. B. 87 の番号が打たれ、現在はヘルンレ写本を収める Box 28 の Plate No. 8 に保存されている。トーマスは写本の片面の写真しか付していないが、上述のように Box 28 の写本であるので、東洋文庫に来ているマイクロフィルムから両面とも見ることができる(コマ No. 261-262)。しかし本経の断簡はこれですべてではない。まず OMPB のスタイン写本 Or. 8212 の15番(スタイン番号 Kha-i-96)、33番(同 Kha-i-303b)、67番(同 Kha-i-213) は本経の断簡である。これは別に私が見つけたわけではない。すでにスタインの探検報告書所載の目録に出ているのである。ただ目録ではこれらの断簡が『首楞嚴三昧経』であるとするだけで、漢訳あるいはチベット語訳の対応箇所が示されているわけではない。恐らく写本に現われる Śūraṅgamasamādhī の語、および対告衆の菩薩名 Dṛḍhamati によって判断しただけであろうが、今に至るまでこの指摘が忘れ去られていたのは何とも残念である。一方、I O L のスタイン写本にも本経は存する。Kha-i-200 がそれで、スタイン写本 Box 43 の Plate No. 64 に収められている。これも Box 43 の写本であるので東洋文庫のマイクロフィルムに含まれる(コマ No. 130-131)。この断簡はラモート博士の分節で § 115-119 に対応するが、これが本経であることは目録は指摘せず、私が見い出したものである。またこれらの断簡は、いずれも西域南道のコータンの東、ドモコ・オアシス近くの写本の宝庫カーダリック(Khādarik, Khadarik or Khadariq)の遺跡から出土したもので、写経生は異なるが、いずれも正形グプタ文字(Upright Gupta Brāhmī, Sander 女史の呼名では Early Turkestan Brāhmī type b)<sup>⑯</sup>で貝葉形用紙に墨で書かれている。このうち、Or. 8212 に含まれるものはいずれも同一写本の一部であるが、

トーマスの発表したものと Kha-i-200 はそれぞれ別な写本に属する。従って三種の写本の残欠が同じ遺跡から取り出されたわけである。ただこれらの未出版の断簡はいずれも小さなもので、紙幅の都合もあり、本稿では取り上げない。関心のある方は是非東洋文庫のマикроフィルムを取り寄せて読んでいただきたい。

**【新断簡】** しかしまだマイクロフィルム未収の数多くの写本がある。私はその中にも本経の断簡を見出しした。それがここで取り上げる断簡である。これは I O L のヘルンレ・コレクションのマикроフィルム未収写本に含まれる二つの断簡で、143. S. B. 103 および 143. S. C. 65 という番号が付けられ、Box 23 の Plate No. 13 および Box 24 の Plate No. 21 の中に保存されている。二つの断簡ではあるが、読んでみると二つは接続し、同一葉が破れたものであることが分かる。前者は一葉の右半分、後者は残された左半分のさらに右半分に相当する。従って左四分の一は失われたままである。写本の綴じ穴は左四分の一の所にあると思われるが、143. S. C. 65 の左端にその一部が残っている。一葉の四分の三が回収されるわけである。残された部分から推定すれば、一葉のサイズは約10cm×31cm 程度である。本稿末尾に写本の写真を付しておいたので参照していただきたいが、貝葉形用紙に片面八行づつ書かれている。文字は他の写本と同じく正形グプタであるが、別な写本である。つまり第四の写本である。なお、この断簡もカードリックの遺跡から出たものである。この一葉は表面が砂と水で洗われ、消えかかった文字も多く解読は困難を極めるが、とにかく以下に二つの断簡を接合してローマ字転写し、併せて対応するチベット語訳と漢訳を示そう。

用いた記号：+失われた文字 [ ]破損した文字 ( )復元した文字 ..判読不能文字 \* Virāma ///ここで写本が破れていることを示す ○綴じ穴 (!) sic

### Recto

1. /// (la) [bdhā] daśānām ca devaputrasahasrāṇām ānulomikadharmakṣāntipratilābho 'bhūṣit\* atha bhagavām taṃ irddhābhisamskā-
2. /// .. ca [sim]h[ā]sanām a .. . . . si ekaṃ caiva tathāgato(!) sarvbapariṣāṃ paśyati ○ tatra khalu bhagavām dṛḍhama-
3. /// (dṛ)ḍhama [te] samādhim na [pra] (thamabhū)misthito bodhisatva

- pratilabhati na dvitiiyabhūmīsthito na tr-
4. /// ○ na ṣaṣṭha na saptama [na] (aṣṭama) [na navama] bhūmīsthito bodhisatvaṃ(!) śūraṅgamasamādhiṃ pratilabhati daśabhū-
  5. /// ○ [tvo] śūraṅgamasamādhiṃ pra [tila] (bhati) • • • [dṛḍha] mate katamā sā śūraṅgamām(!) samādhi // yad idaṃ ākāśadhā-
  6. /// + + + + [ci] ttavyavalokana [pra] (tyakṣa)tā (indri) [ya] parāvaram [jñā] jñānam\* sthānāsthānavyavalokanapratyakṣatā • sarvba-
  7. /// + + + (nā) [nā] dhimu [ktipra] ve [śa-a] (sampramoṣam\*) nānā [dhā-] (tu-an) [ekadhā] (tu)pratyakṣatā padmaghoṣasamādhivikkriḍanatā
  8. /// + + + + sarvbasamā [dhisa] (māpatti-) [a] • • • • tā (sarvbatra) [gā] (min) i [pra] tipadā [vya] valokana [tā anāva] ra [ṇa-]

### Verso

1. /// + + + + (ca)kṣupaśyanatā • ā (śravakṣa) yaprahāṇa • • cekāntiya (!) prāptijñānam\* rūpārūpa [sama] (tāpra) [veśajñā-]
2. /// + + + + [pra] tīśrukaruda (!) gho [ṣasamatā sarvbaśa] bdha (!) prav- [e] śapūrvbāntaghoṣasamatā • svāra • • • dharaṇi (!) a [nuprav] e-
3. /// + + + + ṇatā ya [thāpiccara (!) dha] (rma) deśanatā kālākālavya- valokanatā indriyaparivarttajñā [nam\*]
4. /// ○ [ta] koṭi-a [nu] praveśam\* sa [tva] pragrahanigrahakośalyajñā- nam\* sarvbaṣāpāramita (!) pāripūrī aka [lpita-i-]
5. /// ○ kalpaparikalpāsamudga (ma) naṃ asamprabhedadharmadhātu- sa [mata] lapra [veśa] jñānam\* sarvbatathā (ga) ta [pā-]
6. /// [sa] rvbatathāgatadharmadeśanādhāraṇa- [a] sampramoṣam\* pratibhā [so] pamakāya [sa] rvbalokadhātuvikurvba [ṇa] tā
7. /// • • .ijñājñānam\* triratana (!) vaṃ [śa] • • dhāraṇatā aparāntakoṭi- gataka [lpa] sannāha- [apari] khedatā sarvbopapaty. • • •
8. /// + sarvbopattiyathākṛyādarśanajñānam\* sarvbasatvaparipāca- nakauśalyatā sarvbasatvaparijānana [kau] śa-

[P. ed. Thu 283b 7-284b 8, D. ed. Da 260a 4-261a 3] § 19••• de bzhin gshegs pa la blta ba bstan pa 'di bshad pa na / tshangs pa mnyam pa



nyid la gnas pas chos la rjes su 'thun pa'i bzod pa thob bo // lha'i bu  
khris kyang chos la rjes su 'thun pa'i bzod pa thob par gyur to // § 20  
de nas bcom ldan 'das kyis de 'dra ba'i rdzu 'phrul bsdus nas de bzhin  
gshegs pa'i sku de dag thams cad mi snang bar byas pa dang / 'khor de  
dag thams cad kyis de bzhin gshegs pa gcig bu mthong ngo // § 21 de  
nas bcom ldan 'das kyis byang chub sems dpa' blo gros brtan pa la bka'  
scal pa // blo gros brtan pa dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin ni byang  
chub sems dpa' sa dang po la gnas pas mi 'thob / sa gnyis pa la gnas  
pas ma yin / sa gsum pa la gnas pas ma yin / sa bzhi pa la gnas pas  
ma yin / sa lnga pa la gnas pas ma yin / sa drug pa la gnas pas ma  
yin / sa bdun pa la gnas ma yin / sa brgyad pa la gnas pas ma yin / byang  
chub sems dpa' dgu pa la gnas pas mi 'thob ky'i / blo gros brtan pa dpa'  
bar 'gro ba'i ting nge 'dzin ni byang chub sems dpa' sa bcu pa la gnas  
pas 'thob bo // blo gros brtan pa (D. de la) dpa' bar 'gro ba'i ting nge  
gang zhes na / 'di lta ste / (1) nam mkha'i khams bzhin du sems bskyed  
pa shin du yongs su sbyang ba byas pa dang / (2) sems can thams cad  
kyi sems la rtog pa mngon sum du gyur pa dang / (3) sems can thams  
cad ky'i dbang po mchog dang / mchog ma yin pa shes pa dang / (4) gnas  
dang gnas ma yin pa la rnam par lta ba mngon sum du gyur pa dang  
/ (5) las rnam par 'byed pa thams cad la las ky'i rnam par smin pa  
la 'jig pa shes pa dang / (6) mos pa sna tshogs la 'jig pa mi brjed pa  
dang / (7) khams sna tshogs dang / khams du ma dag mngon sum du  
gyur pa dang / (8) tshangs pa'i dbyangs dang / ting nge 'dzin gyis rnam  
par rtse ba dang / rdo rje lta bu'i ting nge 'dzin mthong zhing shes pa  
dang / ting nge 'dzin dang / snyoms par 'jug pa thams cad gcig tu gyur  
pa dang / (9) thams cad du 'gro ba'i lam shes pas rnam par lta ba dang  
/ (10) sngon gyi (P. mngon gyi) gnas rjes su dran pa'i shes pa la sgrib  
pa med pa dang / (11) lha'i mig thogs pa med pas mthong ba dang /  
(12) zag pa zad par bya ba dang / spang bar bya ba'i phyir dus gcig tu  
'thob pa shes pa dang / (13) gzugs dang gzugs med pa'i mnyam pa nyid  
la 'jug pa shes pa dang / (14) gzugs thams cad ston cing rnam par 'phrul

bas rnam par rtse ba dang / (15) sgra skrad thams cad brag cha'i (D. brag ca'i) sgra dang mnyam pa dang / dbyangs kyi yan lag rnam par dag pa dang / (16) gzungs (P. gzugs) la 'jug pa (P. par) shes pa dang / (17) sems can (P. bdag sems can) thams cad legs par bshed pas tshim par byed pa dang / (18) so so ci rigs par chos 'chad pa dang / (19) dus dang dus ma yin pa la rnam par lta ba dang / (20) dbang po 'gyur ba shes pa dang / (21) chos 'chad pa don med pa ma yin pa dang / (22) yang dag pa'i mtha' la 'jug pa shes pa dang / (23) sems can thams cad rab tu gzung ba dang / tshar gcad pa la mkhas pa shes pa dang / (24) pha rol tu phyin pa thams cad yongs su rdsogs pa dang / (25) spyod lam la ma brtags pa dang / (26) rtog pa dang / rnam par rtog pa dang / yongs su rtog pa thams cad yang dag par bcom pa dang / (27) chos kyi dbyings tha mi dad pa mnyam pa'i ngos la 'jug pa shes pa dang / (28) de bzhin gshegs pa thams cad kyi zhabs kyi drung du skad cig gis lus ston pa dang / (29) de bzhin gshegs pa thams cad kyis chos bshad pa 'dzin cing mi brjed pa dang / (30) mig yor lta bu'i lus 'jig rten gyi khams thams cad du rnam par 'phrul ba dang / (31) thegs thams cad kyi nges par 'byung ba ston pa la mkhas pa dang / theg pa chen po la mi nyams pa dang / dkon mchog gsu m gyi rigs 'dzin pa dang / (32) phyi ma'i mtha'i mur thug pa'i (P. thugs pa'i) bskal par go cha sra zhing yongs su mi skyo ba dang / (33) skye ba'i gnas thams cad ci rigs par byed pa ston pa dang / (34) sems can thams cad yongs su smin par bya ba shes pa la mkhas pa dang /

[大正, 卷15, 631a 15-b 14] § 19……說是法時。等行梵王及万梵天於諸法中得柔順忍。§ 20 爾時如來還攝神力。諸仏及座皆不復現。一切衆會唯見一仏。§ 21 爾時仏告堅意菩薩。首楞嚴三昧非初地二地三地四地五地六地七地八地九地菩薩之所能得。唯有住在十地菩薩乃能得是首楞嚴三昧。何等是首楞嚴三昧。謂修治心猶如虛空(一)。觀察現在衆生諸心(二)。分別衆生諸根利鈍(三)。決定了知衆生因果(四)。於諸業中知無業報(五)。入種種染欲人已不忘(六)。現知無量種種諸性(七)。常能遊戲華音三昧。能示衆生金剛心三昧。一切禪定自在隨意(八)。普觀一切所至所道(九)。於宿命智得無所礙(十)。天眼無障(十一)。得漏

尽智非時不証(十二)。於色無色得等入智(十三)。於一切色示現遊戲(十四)。知諸音声猶如響相(十五)。順入念慧(十六)。能以善言悅可衆生(十七)。隨応說法(十八)。知時非時(十九)。能轉諸根(二十)。說法不虛(二十一)。順入真際(二十二)。善能撰伏衆生乃類(二十三)。悉能具足諸波羅蜜(二十四)。威儀進止未曾有異(二十五)。破諸憶想虛妄分別(二十六)。不壞法性尽其辺際(二十七)。一時現身住一切仏所(二十八)。能持一切仏所說法(二十九)。普於一切諸世間中自在變身猶如影現(三十)。善說諸乘度脱衆生常能護持三宝不絶(三十一)。発大莊嚴尽未来際而心未曾有疲倦想(三十二)。普於一切諸所生処常能現身隨時不絶(三十三)。於諸生処示有所作(三十四)。善能成就一切衆生(三十五)。善能識知一切衆生(三十六)。

この箇所はラモート博士の分節で § 19 の最後から § 21 の中ほどまでに相当する。これに重なりあう別な梵文断簡，コータン語訳断簡，他文献の引用は知られていない。§ 21 には首楞嚴三昧が羅什訳で百項目にわたって定義されている。羅什訳は割注で百項目の番号を付す。上記チベット語訳に挿入した番号は私が付したものである。丹治昭義教授が指摘するように、チベット語訳はその内容も数も羅什訳と異なる部分がある。この断簡は羅什訳百項目の第三十六項目までである。左四分の一が失われ、一葉に含まれる文章すべては知りえないが、解読出来た範囲で語形と内容の問題点を指摘しておきたい。

**【語形】** サンディは不規則な点が多く、母音結合はコンパウンド内部でもしばしば分離して書かれている。中央アジア写本に一般的な語形，sarvba→sarva (r. 2, 6, 8, v. 2, 4, 5, 6, 7, 8), pūrvba→pūrva (v. 2) とともに，irddha→ṛddhi (r. 1) という特殊な語形も見られる。anupraveśa (v. 4), asaṃpramoṣa (v. 6) は中性で用いられている。(sic) を入れた語は写経生の誤写と思われるが，[pra]-tiśrukaruda (v. 2), ya [thāpiccāra] (v. 3) はどう訂正したらよいであろうか，また bodhisatva (r. 3), samādhi (r. 5) ṣaṣṭha (r. 4) 等も Buddhist Hybrid としてそのまま主格を意味するのかどうか，現時点では判断を保留せざるをえない。

**【内容】** この断簡を羅什訳，チベット語訳と比較してみよう。

(1) 羅什訳第8項目の「華音」に対応するチベット語訳は tshangs pa'i dbyangs (\*brahmaghoṣa) であるが，この断簡では padmaghoṣa (r. 7) とあり，

羅什訳に一致する。

(2) 羅什訳 34, 35, 36 項目のうち、「於諸生処示有所作<sup>③4</sup>」にあたる項目はチベット語訳になく、チベット語訳は第34項目として羅什訳「善能成就一切衆生<sup>③5</sup>」「善能識知一切衆生<sup>③5</sup>」の2項目を併せたような「一切衆生を成熟することを知るに巧みである」という1項目があるだけである。ところがこの断簡の v. 8 には<sup>③4</sup> sarvbopapattiyathākryādarśanajñānam, <sup>③5</sup> sarvbasatvapariṣānakausalyatā, <sup>③6</sup> sarvbasatvaparijānana [kau]śa (lyatā) という羅什訳3項目に相当する語がある。

(3) § 20 の羅什訳の一文「諸仏及座皆不復現」に対して、チベット語訳は「それらすべての如来の身体は消え去り」とある。これは仏陀が神通力を元に戻して、無数の獅子座の上に神変で作り出された無数の如来が消え去ったことを意味する。この部分、断簡では摩滅が激しくかすかに [sim]h[ā]sana (r. 2, 獅子座) という語が読み取れるだけである。しかしここがチベット語訳のような文章であったとは思えない。恐らく羅什訳の中の「座」は原文に simhāsana とあったのであろう。

(4) § 21 の冒頭、初地から九地の菩薩は首楞嚴三昧を得ることができず、ただ十地の菩薩だけがそれを得ることを説く文章も、羅什訳と梵文断簡に対し、チベット語訳だけは、初地から九地すべてに -bhūmisthita という語がついている。

以上四点だけであるが、こうやって見てゆくと、この梵文断簡は羅什訳とチベット語訳の相違する部分ではことごとく羅什訳の方に一致していることが分かる。(1)で指摘した padmaghoṣa について、ラモート訳は全体としては羅什訳に基づくにもかかわらず、この語だけはチベット語訳を取っている (p. 133)。恐らく brahmaghoṣa の方が本来の語形で、西域で書写を重ねているうちに padmaghoṣa という variant を生んだのであろうが、それが羅什訳に一致することは、この写本の性格を考える上で注意すべきである。『首楞嚴三昧経』は十回も漢訳され、写本もネパール系の伝世本は知られないが、西域出土本が四組確認されるに至った。出土写本の年代は不明ではあるが、西域から中国にかけて多いにはやった初期大乘経典の一つと言えよう。

【結び】 西域南道カードリックの遺跡から取り出されたわずか一葉の零墨は、それが書写され仏教が栄えた古代シルクロードへ私を誘う。しかし今世紀初頭

に偉大な探検家たちによって齎されながら未解説のまま人知れず眠る写本は多い。一体それに何が隠されているのか、我々のすべきことはまだまだ残されているのである。

(1987年9月7日)

- ① 調査の事情については、拙稿「ロンドン・インド省図書館の一室から——スタン・ヘルンレ中亞梵語写本を調査して——」(『大谷大学真宗総合研究所研究報』No. 16, 1987-3, pp. 13-15), および『東洋文庫チベット特別調査研究年次報告』(昭和61年度) pp. 1-4 参照。
- ② Hoernle ed., *Manuscript Remains of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan*, vol. 1 (Oxford, 1916). ヘルンレは vol. 2 の出版に着手しながら亡くなったが、その原稿が他のヘルンレのノートとともに I O L に保存されている。整理番号 Mss. EUR. D. 723. これを見るとヘルンレは *An Ancient Medical MS from Eastern Turkestan* というタイトルでラヴィグプタの医学書 *Siddhasāra* の敦煌出土コータン語訳写本 Ch. ii. 003 を出版する予定であった。
- ③ 第1次探検(1900-1901)については *Ancient Khotan* (Oxford, 1907) vol. I, pp. 288-303, 438-442, 第2次探検(1906-1908)については *Serindia* (Oxford, 1921) vol. III, pp. 1432-1459, 第3次探検(1913-1916)については *Inner Most Asia* (Oxford, 1928) vol. I, pp. 1017-1031 参照。
- ④ 東洋文庫マイクロフィルム『旧印度省図書館蔵梵文断片』(V-5-E-5)
- ⑤ 東洋文庫より1988年3月出版予定『インド省図書館所蔵中央アジア出土大乘涅槃経梵文断簡集』(*Studia Tibetica*, No. 14)。なお、拙稿“New Sanskrit Fragments of the Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra in the Stein / Hoernle Collection: A Preliminary Report” *The Eastern Buddhist*, Vol. 20, No. 2 (Autumn 1987) pp. 105-114 にも簡単な報告を述べた。33枚の断簡は三種の写本に分かれ、15葉を構成する。この中には同経のレニングラード写本6葉の欠落部分を補う3枚も含まれる。
- ⑥ どこに発表されるかはまだお聞きしていないが、この6枚はヘルンレ写本の東洋文庫マイクロフィルム未収写本の中に見い出されたもの。
- ⑦ 東洋文庫マイクロフィルム『大英博物館蔵中亞文獻』(V-5-E-6)
- ⑧ 平川彰「ヨーロッパの中央アジア仏教写本」(『印度学仏教学研究』10-1, S. 37) pp. 319-320 参照。なお博士が「サンスクリットの般若経七十四種」(p. 319 下)と述べるのは正しくない。「般若経を含む七十四種(正確には七十三種)」と言うべきである。これは Or. 8212/1-73 のことである。博士は I O L の写本のマイクロフィルムを東京大学の印度哲学研究室に将来したと言うが(p. 320 下), 斎藤明氏に探していただいたところ、現在も確かに研究室にあるとのことであった。これは東洋文庫にあるものと同一フィルムである。
- ⑨ 塚本啓祥他『梵文法華経写本集成——ローマ字本・索引——』第1巻(梵文法華

経研究会, 1986) pp. (16)-(20), 塚本「梵文法華経の研究」(『法華文化研究』No. 13, 1987) pp. 53-58

- ⑩ *Preliminary List of Manuscripts in Languages of Central Asia and Sanskrit from the Collections Made by Sir M. Aurel Stein, K. C. I. E.* この目録の複写に際し, OMPBのブラウン女史の手を煩わせた。
- ⑪ これについては E. Conze の調査報告がある。“Preliminary Note on a Prajñā-pāramitā-Manuscript” *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1950, pp. 32-36. この写本はギルギット写本の丸形グプタ文字と全く同一文字で書かれた貝葉本である。
- ⑫ No. 113-115 の3枚は他のスタイン写本のプレートから『大乘涅槃経』の断簡だけ取り出し, 新たに私によって調査期間中に作成されたもの。
- ⑬ この中の『法華経』のプレート6枚は, 湯山明博士がフィルムで将来し, 戸田宏文教授によって発表された断簡の原本であると思われる。戸田「梵文法華経写本研究ノート」(『印度学仏教学研究』27-2, S. 54) pp. 926-921.
- ⑭ この中の写本で既発表のものは, 私の知る限り久野芳隆博士による『迦葉品』の断簡だけである。「西域出土仏教梵本とその聖典史論上の地位(上)」(『仏教研究』第2巻3号, S. 13) pp. 71-110. 博士はこの断簡を F.W. Thomas から見せてもらったと言う。これは偈を含まない『迦葉品』の古形を伝える重要写本であるが, 博士は folio number を文字に読み誤るという単純ミスを犯している。この断簡には三桁の folio number があり, 『迦葉品』の単独写本の一部であったとは思われない。
- ⑮ C. Bendall ed., *Çikshāsamuccaya (Bibliotheca Buddhica I)* pp. 8, 91.
- ⑯ É. Lamotte, *La Concentration de la Marche Héroïque (Śūraṅgamasamādhisūtra), Mélanges Chinois et Bouddhiques, XIII (Bruxelles, 1965)*. 桜部建博士の書評があるので参照していただきたい。(『仏教学セミナー』第13号, 1971) pp. 74-80.
- ⑰ R. E. Emmerick, *The Khotanese Śūraṅgamasamādhisūtra* (Oxford, 1970). 同じ写本を H.W. Bailey も出版している。*Khotanese Buddhist Texts—Revised Edition* (Cambridge, 1981) pp. 1-7.
- ⑱ Bhikkhu Pāsādika, *Śūraṅgama Samādhī Sūtra* (The Bihar Research Society, Patna, 1970).
- ⑲ 『大乘仏典(維摩経/首楞嚴三昧経)』(中央公論社, 1974) 所収。
- ⑳ F.W. Thomas, “Miscellaneous Fragments”, Hoernle, *op. cit.*, pp. 125-132.
- ㉑ L. Sander, “Brāhmī Scripts on the Eastern Silk Roads”, *Studien zur Indologie und Iranistik*, Heft 11/12 (1986) pp. 159-192.
- ㉒ 丹治前掲和訳 p. 396, n. 45 参照。
- ㉓ コータン語訳写本もカードリックの遺跡から出たものである。

\* 本稿は昭和61年度文部省科学研究費補助金「海外学術調査」による研究成果の一部である。

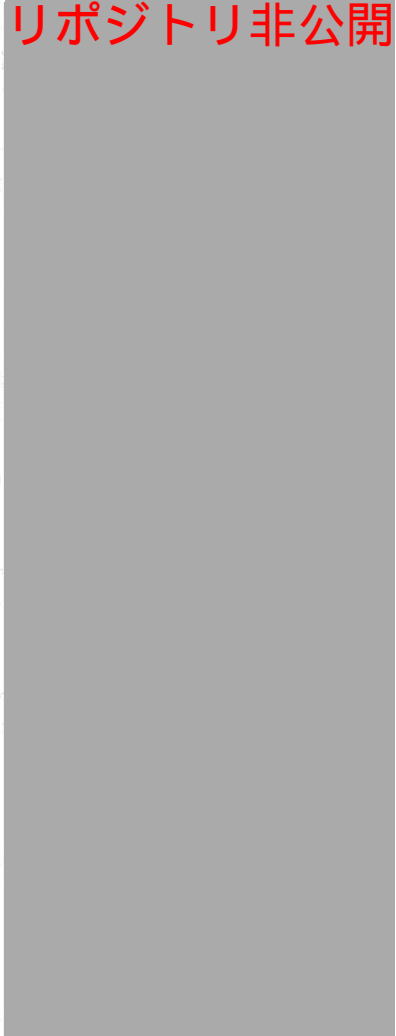
リポジトリ非公開



143. S. C. 65 Recto

143. S. B. 103 Recto

リポジトリ非公開



143. S. C. 65 Verso

143. S. B. 103 Verso